

「人を繋ぐ回覧板」

1. 地方自治としての回覧板

地方自治に触れる機会というのはあまり無い機会のように思う。しかし、身近なところに目を向けてみると意外なものが実は大きく地方自治に関わっているものだ。そこで今回私が注目したのが、「回覧板」のシステムである。回覧板は、私の中で幼少期から何も疑うことなく日常生活に溶け込んでいる存在であった。隣の家から回って来たものに目を通して、また隣の家に戻すという単純な流れであり、世界的に情報伝達機能のデジタル化が著しく発達している現代において、このような単純なシステムは言ってしまうと地味でデジタルに簡単に代替え出来そうな回覧板がなぜ今なお残っているのか。回覧板の持つ可能性について自分の経験や事例を基に考察していく。

2. 地元の回覧板の実態

私の地元・岐阜県可児市では回覧板を回すというのは自治会に加入していれば、至って当たり前の行為である。回覧板は月に大体2~3回の頻度で回され、自治会や校区内の小中学校・高校からのお知らせや広報資料だけでなく、市からも資料が配布されており、市議会で話し合われた内容の議事録であったり、予防接種や各種検診など保険・衛生のお知らせであったり、市政に関わることから民生に関わる細かい事まで詳細に記載された冊子が回覧板に必ず挿まれている。豊富な情報が回覧板には詰め込まれており、どれも地域に根差した自分に関係するような情報ばかりであるため、回覧板はそれらを知るツールとして非常に大きな役割を担っていると考えられる。

確かに近年よく見かけるようになった、他の地域から引っ越して来た若者世帯や在日外国人の増加に伴い自治会に加入しない人が少しずつ出てくるようになった。また冒頭で述べたように、情報のデジタル化によって市のホームページ上で回覧板同様の情報を気軽に得ることが可能だし、紙資源を大量に利用しなくても良く環境に配慮できるといったメリットも考えられる。それでもなお回覧板が廃止されないのはそれ以上の利点が考えられるからではないだろうか。

3. 地域振興としての回覧板

回覧板が廃止されない理由として経験から考えられる利点が3点挙げられる。

(I) 住民同士の繋がりとしての回覧板

1点目に回覧板が住民同士の **Face to Face** の繋がりを生む役割があると考えられる。回覧板が成り立つためには郵便が運ぶ訳でもなく、住民が直接回す必要がある。その際近所の人に出会ったり、隣の家に住人と挨拶程度の会話を交わしたりすることでちょっとした繋がりが生まれる。私自身、幼い頃に回覧板を出しに行くと隣の家のおばあちゃんやおじいちゃんに、「大きくなったね〜」と声を掛けていただいたり、お菓子や果物などをおすそ分けしていただいたり、何かと可愛がっていただいた記憶がある。また、近所のおばさん同士で回覧板を出しに行ったつもりが数時間も立ち話をしているといった光景をよく目にする。回覧板を回すことで近隣の住民同士であっても交流が生まれるのは、いくらデジタルの発展が素晴らしいものであっても培えないものであるように思う。

(Ⅱ) どの世代にも分かりやすい安全・安心な情報ツールとしての回覧板

2点目に回覧板の明確さが挙げられる。ホームページでは自分の知りたい情報をすぐに検索して知ることが出来るメリットがある。しかし、地元に限らず地方自治体及び日本全国において高齢化が進む中で、パソコンの使い方に疎いであろう高齢者の方々にも紙媒体の情報資源は非常に有効的であると考えられる。これはインターネットの普及に伴い新聞を読む人が減少する中でも新聞が大きな情報媒体として依然として残り続けている事例と同様であると私は捉えている。高齢者のみならず、豊富な写真などの様々な工夫は小さな子どもでも読む楽しさを与えているように思う。

またインターネットでは情報操作や改ざんといった問題も情報化が進むに連れて大きな問題として注視されているが、回覧板なら出所がはっきりとしているため安心して読むことが可能であると考えられる。

(Ⅲ) まちづくりとしての役目としての回覧板

3点目にまちづくりに大きな役割を果たしていると考えられる。上記に述べたように、豊富な情報が詰まっている回覧板は、市政や自治会で行われていることを比較的リアルタイムに知ることが出来るため、住民は情報を共有し、知ることによって市政の“今”に触れることが可能である。このことで、事業やイベントに参加することが出来たり、市政に対して意見を述べたりすることが可能である。実際に地元の回覧板には様々な連絡先や意見広告も掲載されているため活用方法は無限大である。

また、まちづくりの事例として静岡県焼津市では「まちづくり回覧板」と題した回覧板を取り入れており、住民全体で今後の焼津市の在り方について話し合い、その様子と内容を回覧板として広報することで、住民一人ひとりが市政に実際に関わり、運営していることが窺える。このように回覧板による情報発信及び情報の活用方法次第で、住民がより身近にまちと繋がる事が出来る架け橋となり得る可能性が秘められている。

4. 回覧板の展望

これまで回覧板の実態と可能性について考えてきた。回覧板は単なる情報伝達ツールとしてだけではなく、地域住民同士を、また地方自治といった一見遠く自分とは関係のないと思える出来事と住民を繋ぐ、地域振興の一環として温かみのある欠かせないものであると考えられる。

今後の日本は今以上に少子高齢化が進み、財政赤字や医療・福祉の問題がより一層深刻化すると見込んでいる。このような国内情勢の中で地方自治体はますます過疎化が進み、都市との格差が明確なものとなっていくのではないかと予想できる。一方で、技術革新の進歩に伴い情報伝達技術もより手軽で容易なものになっていくだろう。その中で今後も回覧板が機能し続けることは難しくなっていくかもしれない。しかし、回覧板のシステムには先端技術を持ってしても敵わない、疎遠になりつつある生身の人と人との繋がりを持たせることができ、その繋がりや情報の共有は地域内での結束を深化させ、強化する力を持っているように思われる。回覧板を回す、という単純で誰にでも出来る行為こそが地方自治の基礎を担っているのではないだろうか。だからこそ、現代化の風潮に関わらず継承され続けているのだ。何気ない日常の一端も地方自治に関与しており、今後も守り続けていくべきである立派な伝統ではないかと考える。